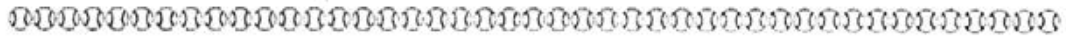


「運動会」

目次

運動会についてのメモランダム	2
要約	8
はじめに	10
1. 運動会の風景	13
●運動会の開催要項	13
●運動会あれこれ	15
●運動会に見られる地域差	18
2. 運動会で行われる種目	25
●運動会の種目と変化	25
●実施種目の地域差	29
●種目実施上の配慮や工夫	35
3. 運動会のもつ意味	38
●運動会の目的	38
●計画への配慮と運動会の評価	42
●変化の方向	45
4. いくつかの実践の中から	49
●学校差が少ない	49
●走りまわるタイプとゲーム主体型	51
●家庭や地域の協力を得て	53
●個性的なプログラム	56
●学校としての取り組み方	66
資料1 秋季運動会実施計画案	67
(栃木県下都賀郡壬生町立睦小学校)	
資料2 秋季運動会実施計画案	75
(神奈川県平塚市立豊田小学校)	
資料3 調査票見本および集計表	77



運動会についてのメモランダム

放送大学教授 深谷昌志



運動会がつまらなくなった

このところ、運動会がつまらなくなったような気がする。ひと昔前までの運動会の持っていた底抜けに明るい開放感が薄れ、教育的な配慮は行き届いているものの、学校行事につきものの堅苦しさが増した印象を受ける。

そう言えば、運動会を9月末に行う学校が増加している。プール納会や文化祭、遠足など、2学期には、ただでさえ、学校行事が多

く、学級がおちつかない。だから、学校行事を9月にかため、10月に入ったら、学習指導に全力を注ぎたいというのであろう。

また、平日に運動会を実施する学校も少なくない。平日開催ならば、親との不必要なまきつも避けられるし、教師が日曜出勤する必要もない。そうした事情から、運動会の平日開催は、学校関係者から好評を得ていると言われる。

これらの変化に加え、単純な形での徒競走



を避けようとする気運も強まっている。走る力の速い、遅いの開きがはっきりしているのに、それを、むき出しのまま、走らせるのは、遅い子たちの引け目意識を強めるだけである。だから、障害物競走などの形を借りて、走る力以外の要素を加味させるか、それとも、走る速さの同じ者同士を走らせるかが望ましい。

教師たちから、そうした説明を聞くと、もっともだなと思う反面、理に走りすぎ、すっきりとしない感じが残る。

子どもたちに序列意識を植えつけたくない。だから、運動会でも、序列をあらわにするのを避けたい。当然、1着の子どもにノート、2着にえんぴつなどの賞品を与えるなどは、廃止すべきだということになる。その代わり、学級対抗や紅白対抗のような集団間での競争をメインに据えたいという。

こうした配慮が重なってくると、残暑の厳しい9月末の平日、父母の参加も少ないままマスゲームや障害物競走を主体とした運動会が行われることになる。その結果、かつての運動会の持っていた、華やかな祭りにも似た雰囲気は薄れ、学校の通常の教育活動を拡大した形の地味な運動会という性格が前面に出てくる。

運動会のルーツ

ここらで、運動会のルーツを探ってみよう。小学校に限ると、明治20年代前半に、運動会

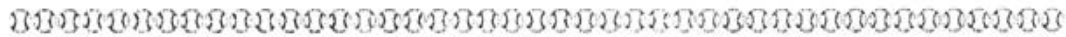
の記録が見受けられる。

例えば、東京府下板橋の紅梅小学校では、明治20年の10月13日に飛鳥山で開かれた合同運動会に38名の子どもたちが参加し、人馬競争や戴のう競争で4人が入賞したとの記録が残されている。この頃、北豊島郡には、23校におよぶ小学校が設置されているので、合同運動会にも、これらの学校が参加したと思われる、当然のことながら、飛鳥山に遠い紅梅小学校では、子どもたちが午前6時に学校を出発している。（『板橋区教育百年のあゆみ』）

また、新潟県の小千谷小学校でも、前年の5月、新潟市で行われた連合大運動会に刺激を受けて、22年6月12日に、長楽寺の境内を借りて、合同運動会を開催している。（『小千谷小学校史』上巻）さらに、埼玉県下では、すでに、明治18年10月に一志郡の連合運動会が開催されたという記録が残されている。（『稲葉尋常小学校沿革史』）

このように、この頃の運動会を特色づけるものは、いくつかの学校が合同する形態であった。もっとも、小学校で体操場の規定がもちこまれたのは、小学校令の「小学校設備準則」（明治23年）で、「体操場八方形」、「生徒100名未満800坪以上」、100名以上の場合は「1名ニ付1坪以上」と定められた以降のことであるから、それ以前は、専用の運動場がなく、そのため、寺院の境内を借りて、合同して運動会を開くことになったと考えられる。

それと同時に、もう一つ、初期の運動会で



目につくのは、軍事的な性格が強い事実であろう。当時のプログラムを見ると、銃操術、隊列運動、旗取などが挙げられている他、「120名の生徒紅黄白の3隊に分れ1隊毎に大隊旗を立て各其隊色の紙手標紙鉢巻をなし秩然として整列し」（『埼玉教育雑誌』21号）、「1聯区毎に1本ずつ各々異なる旗を押し立て又聯区中の各学校にては1校毎に色を異にし校区を記したる旗を立てて生徒を随へたり。其の人員凡そ1,600余人入隊伍肅然整列して敬礼を為し」（『千葉教育会雑誌』明治19年4月、鹿野山体操大演習より）など、隊列を組んで、運動会に参加する姿を伝える記録が多い。

もともと、運動会は、日本になじみの薄い行事であった。寺子屋では、花見や遠足的な行事が見受けられるものの、体育に対する配慮が欠けているし、藩校では、刀術や弓術、馬術などが奨励されてはいたが、これらは、武芸の鍛練であり、スポーツやゲーム的な色彩は少なかった。

したがって、運動会は、いわば、文明開化とともに、西欧からもちこまれた行事であった。明治7年3月、海軍兵学寮で行われた「生徒競争遊戯会」が、日本で始めて開催された運動会と言われるが、プログラムの中に200ヤード競走や高飛び、二人三脚、玉投げなどが見られる。（山本信良・今野敏彦『近代教育の天皇制イデオロギー』）

その後、札幌農学校や東京大学などの官立の高等教育機関で運動会が行われているが、

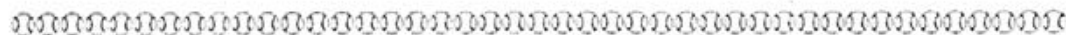
運動会の形式にもっとも強い影響力を与えたのは、森有礼文相の提唱した兵式体操であった。

周知のように、森有礼文相は、教育の中に軍隊の論理をもちこんだことで知られているが、その中枢をなす施策の一つが、兵式体操の導入であった。そして、森は、従順、友情、威厳をつちかう手段として、兵式体操を高く評価し、師範学校を中心に、その徹底を図っている。

明治20年代前半の運動会に見られる「全校生徒ノ隊伍ヲ整ヒテ校門ヲ出テ」、「生徒紅黄白の3隊に分れ1隊毎に大隊旗を立て」などは、そうした兵式体操の思想が運動会に反映されたものと考えられる。

「当日当校生徒ハ各組順次ニ矯正術、徒手運動、隊列運動、啞鈴運動、柔軟体操、技芸体操、銃操術及ヒ競争、旗取、土器割等ヲ演シ、其褒賞ヲ得シ者体操ニ44名、遊戯ニ51名。其閉会セシハ殆ド5時前ニテ頗ル盛会ニテアリキ」（『三重県卷正高等小学校第一年報』明治20年、『三重県教育史』第1巻）などの記録も、「体操ハ時々三四里以内ノ諸学校ヨリ生徒ヲ集合シテ学校ト学校トヲ競争セシメ兵式体操旗取等活発ノ舉動ヲ為サシムルヲ可トス」（『森有礼全集』第1巻）という森有礼の連合形式による兵式体操の理念を具体化したものと言えよう。

その後、明治24年の「小学校祝日大祭日儀式規定」では、「学校長及ヒ教員、生徒ヲ率



キテ体操場ニ臨ミ、若クハ野外ニ出テ遊戯体操ヲ行フ等、生徒ノ心情ヲシテ快活ナラシメンコトヲ努ムヘシ」が奨励されているし、明治27年8月には、井上毅が「体育及衛生に関する訓令」を発し、小学校では、知識の伝達に偏ることなく、体力の向上に努むべきだと指示している。

こうした動きを背景に、運動会は、子どもたちの体力を向上させると同時に、団体訓練をする場として、学校生活の中に定着することになった。そして、明治30年代へ入ると、専用のグラウンドを持つ学校では、単独の運動会を開催する気運が強まってくる。

祭りとしての運動会

「埼玉教育雑誌」（明治22年9月）で、尾沢幸次郎は運動会の効用として

- 1 精神ヲ爽快ナラシムコト
- 2 勇壯活潑ノ気感ヲ養成スルコト
- 3 見聞ヲ広メ且ツ之ヲ強固ニスルコト
- 4 人物ヲ査定スルニ良手段ナルコト
- 5 就学生徒ヲ勧誘スルノ良手段ナルコト

を挙げているが、回数を重ねるにつれて、運動会は、そうした効能書きを越えて、盛大で楽しいものになり始めた。

「当日は予期以上の見物人が神奈川県側からまで轟々と集まってきた。運動会は全く囃にあたった。大成功だった。うづくような愉しさが語りつがれてゆく評判が、学校解体説を

もみ消すように思えた」（添田知道「教育者」）などの他、「運動会には祖母が付き添いにきて、お弁当もお茶もお菓子も、みんな持ってきてくれた。……休憩のとき祖母の傍にいくと、近所の知合いのおばさんが大ぜい来ていた」（多賀義勝「大正の銀座赤坂」）、「近郷の老弱群り来りて観るもの無慮数千人流石に広き原野もさながら人を以て填る計りなり。（北埼玉郡下の合併運動会の記録から、『埼玉県教育史』第4巻）の資料から明らかのように、運動会は、村民が集まって、一日を楽しむ祭りの性格が強まってくる。

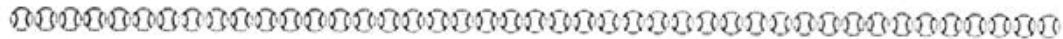
なお、参考までに、明治39年、東京府下の千寿小学校で行われた運動会のプログラムを紹介すると、以下のとおりである。

徒競走、源平遊戯、まりはこび、バスケット、はたむすび、宝拾い、はたとり、デッドボール、スプーンレース、綱引き、御支度競走、障害物競走、紅葉狩り、同窓会員競走など

（『足立教育百年のあゆみ』）

現代の運動会とはほぼ同じ種目が並んでいるのに驚かされるが、運動会が盛大になるほど、ともすると、華美に流れ始める。

したがって、やや極端な論調として、新しい職業として、「運動会の貸衣裳屋。運動会に美衣を着飾るのは今日の通弊なり。これを矯正せずんば貧児のために、運動会の当日だけ、衣類を損金貸にせんとする営業起こり、上野飛鳥山辺に、沢山の露店を見るに至るべ



し」(木村小舟『明治少年文化史話』)という指摘が、的外れと言いがたい状況もあった。

すでに明治18年、東京府芳川顕正知事は、運動会が華美に走りすぎないようにとの通達を発しているが、文部省でも、明治42年1月、運動会が「演劇興業ニ近キモノ」にならないように監督する必要を説いた訓令を示している。

学校サイドで、運動会が派手にならないように指示した具体例として、新潟県小千谷女子尋常高等小学校の保護者向けの案内状からいくつかを紹介してみたい。

「帽子ハドンナ古イモノデモ構ヒマセンカラ有合セノモノデ間ニ合ワセテ下スツテ、今年ハ買ハヌ様願ヒマス。

靴下モ有合セノモノデ結構デアリマス。新ニ買フニシテハ白ナドハ不経済デ考ヘモノデアリマス。猶從來ノ脚半足袋デ無論差支ガアリマセン。

食べモノハオ昼飯ヨリ外ノモノハ一切持タセナイデ下サル様ニ願ヒマス。其外ノ間食ハ学校内デハ厳禁シマシタ」

(大正11年9月、『小千谷小学校史』下巻)

アメリカで見たスポーツ大会

今まで触れてきたように、兵式体操の普及から端を発して、現在でも、運動会は、学校生活をいろどる重要な行事として機能している。

しかし、考えてみると、欧米の小学校では

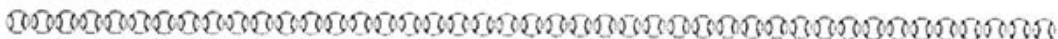
運動会が行われていないから、運動会は、日本の学校を特色づける大きなイベントの一つと言えるのかもしれない。

それだけに、運動会に費やす教師サイドの負担がきわめて大きいので、近い将来、運動会廃止論が登場してくる可能性も強い。事実、同じ学校行事の中でも、林間学校や臨海学校の廃止に踏み切った学校が少なくないし、修学旅行の再検討を考えている学校も多い。そうした流れの一環として、運動会の廃止はともかく、運動会の教育的な意義を見直そうとする動きが起こっても当然であろう。

考えてみると、運動会は恒例の行事として定着していたゆえに、何のために行うのかを掘り下げる機会が少なかったような気がする。そのため、種目の選定や号令のかけ方、放送の仕方などがあいまいになりやすい。

アメリカを訪ねた折、現地の教師たちの主催するスポーツ大会を見学する機会があった。と言っても、学校で運動会を行わないのは、すでに述べたとおりだから、これは、夏休みを利用して、ホームステイをしている日本の生徒たちを対象に、日本側のリクエストに応じて開かれたものであった。

実を言うと、この企画は打ち合わせの段階から難行した。運動会的なイメージで提案した日本サイドに対し、現地の教師から強い異論が提出されたのである。このプログラムは何のためのものか、なんんかの子どもが走るのを、その他の大勢の子が見ているのは時間



の無駄使いになる。体をきたえるのなら、みんな運動した方がよいし、楽しむのが目的なら、スポーツ大会をやるべきだと言う。

結局、郷に入らば郷に従えのとおり、アメリカ側のすすめるスポーツ大会に同意することにした。教師の他に、レクリエーションリーダーの資格を持つ者や体育のスペシャル教師も参加してくれると言う。

当日のプログラムは、水泳、バレー、野球、卓球、サッカーなどを任意に選択する形である。

時間がきて、子どもたちの希望をとった。卓球は台が1台しかないのに、参加したいという希望者が20人に近い。また、水泳を望む者は、25メートルプールしかないのに、100人を超える。われわれだと、当然、人数制限をして、参加者を適当に割り振るのに、そうした動きもないまま、プログラムは開始された。

卓球のスペシャリストは、カウントのとり方を教えただけで、あとは、子どもたちと雑談しているだけ。そして、プール指導のベテランは、泳げない子どもに浮き輪やビート板を貸し、ほぼ20分ごとに、子どもをプールからあげる以外、ほとんど何もしない。野球のコーチは、自分もメンバーの1人となって、ファーストを守っていた。

つまり、教師たちは、ガードマンとして、子どもたちの安全を守る以外は、時の流れるままに、自分自身が楽しんでいるスタイルである。当然、卓球にあぶれた子どもは野球場

へ行くし、プールにあきた子どもは卓球場に顔を出すことになり始める。

日本の常識からすると、なんとも頼りないのは確かだが、なれてしまうと、ゆったりとされていて、気持ちがよい。そして、夕方、スポーツ大会が終わった時、どの子どもたちの顔も、晴れ晴れとしているのが印象的であった。

そうした体験をしてみると、分刻みにスケジュールが組まれ、応援合戦のさかんな日本の運動会は、いかにも、日本的な産物で、マクロにとらえると、森有礼時代のものと、さしたる変化を示していないように思える。

もちろん、現代の運動会にも、祭りのな要素が残っているし、それなりの楽しみがあるのも否定しがたい。したがって、従来の運動会と並行して、別の機会に、子どもたちがのんびりと一日を過ごせるような、ゆったりとしたスポーツ大会があるとよいのではないかと思った。

「今日は運動の日、時間がくるまで、好きな所へ行って、体を動かしてきなさい」というあんばいのプログラムなのだが、塾通いやけいこごなど追われ、なにかとせわしい子どもたちの生活を考えると、こうしたプログラムの実現を真剣に検討してよいのではという気持ちがしてならない。

(深谷昌志「子ども考現学」福武書店より引用)

調査レポート／運動会（全国調査）

要 約



① 運動会の開催期日

運動会を秋に実施する学校が7割、春が5割となっていて、春と秋の2回実施する学校は2割であった。日曜日に実施するのは約3分の2で、平日開催とする学校がふえてきている。（図2）



② 運動会に見られる地域差

昔ながらの地域をあげてのお祭りという雰囲気は北海道や九州などの地方に残されているが、大都市やその周辺の地域では、観客の数はそれほど多くなく、それは日曜日開催率と深くかかわっていると思われる。（地図3～10）



③ 運動会の種目

「徒競走」や「綱引き」など伝統的な種目は今でもなお多くの学校で見られる。しかし、細かな変化を追うと、地域とのつながりを示す種目（地区対抗競技など）が減少し、競争色のうすい華やかな種目（フォークダンスなど）が好まれる傾向にある。（図13）

調査概要

1. 調査主題 運動会
2. 調査視点 「運動会」についての意識、進行状況、種目などの地域的特色を探る。運動会の目的と、

これからの運動会の方向について調査する。

3. 調査項目 運動会の実施期間／子ども1人あたりの演技回数／教育課程の中での運動会の意義／運動会での実施種目について／10年前の運動会と比べて／これからの運動会の方向。

放送大学教授 深谷昌志
 千葉市教育センター 上杉賢士
 横浜市立島ガ丘小学校教諭 戸塚 智
 東京都江戸川区立小松川第二小学校教諭 矢部 崇

④ 運動会の全体像

地域とのつながりが稀薄になり、華やかさが増すなどの変化は見られるものの、運動会の企画や進行の仕方などに大きな変化はなく、実施する種目に工夫や配慮をする程度にとどまっている。(図18)



⑤ 運動会の目的

学校規模が小さい学校ほど、地域とのつながりを重視し、大規模になるほど「集団の規律を学ばせる」など管理的な傾向が前面にうち出される。また、当然のことながら、小規模の学校の教師ほど、実施後の満足感が大きい。(図21、表4、表5)



⑥ 運動会の変化の方向

10年前の運動会に比べて、「整然と進行させるための指導」が強化され、今後もそうした方向で一層指導が強化されそうである。その一方で、子どもたちは、さらに運営や進行から遠ざけられていく。子どもたちにとっての運動会の意味をもう一度考え直してみる必要を感じないわけにはいかない。(図26)



4. 調査時期 昭和60年11月～12月

5. 調査対象 調査対象校の教務主任ないし体育主任の教師

6. 調査方法 小学校へ質問紙を郵送

7. サンプル 全国の小学校より10分の1の抽出で2,500校を選び、調査票を送付した。
 有効サンプル数は1,113校。回収率は44.5%

は じ め に

子どもたちにとって、明日の空模様が最も気になるのが遠足の前日だとすれば、さしずめ運動会はその次くらいに位置しそうである。

青空に一層の彩りを添える万国旗。出発の合図を待つ一瞬の緊張。晴れがましい気分で飛び込む白いテープ。そして、すり傷を押さえながら涙をこらえてめざすゴール。華やかなお祭り気分にも似て、グラウンドに立つとついつい浮き足立ってしまう雰囲気。運動会は、学校行事の中でもビッグイベントとして、地域をあげてのお祭りとしての性格すら持っていた。

ところが、最近、日曜日ではなく平日開催とする学校がふえているという。当然のことながら、保護者の参加は少なくなるから、このお祭り気分はかなりの程度抑えられたものになる。考えてみれば、運動会を心待ちにする子どももいれば、その一方で体力や走力に自信がなく尻込みする子がいて当然である。わざわざ衆人環視の中で優劣を競わせるのは、教育的ではないという考え方があってもよい。また、父親の勤務の都合で、外国で長く暮らした後に帰国した子どもが、運動会で、「なぜ、みんなと一緒に走らなければならないのか」と、担任に素朴な疑問を投げかけたという話

を聞いたことがある。彼らにしてみれば、決して自分で望んでいるわけではないのに、半ば強制的にスタート台に立たされて、むりやり走らされるということが納得できなかったのだろう。

しかし、少なくとも筆者らが子どものころの運動会には、そうした問題を包み込んでなお余りある、底抜けの明るさがあった。子どもにとっては、徒競走で何等になるかが最大の関心事であっても、それを運動会のひとコマにしてしまうスケールがあったような気がする。

今、平日開催、紅白対抗など集団間の競争を中心として、運動会も様変わりしてきている。あらためて、データをもとに運動会の動向を探りながら、その教育的意義や今後の方向について考えてみたい。

調査校の総数は1113校（回収率44.5%）。県別・地方別校数は地図1、2に、調査校のプロフィールは図1に示した通りであった。調査への回答は、各学校の教務主任または体育主任の先生にお願いした。なお、調査時期は、昭和60年12月であったから、本レポートのデータは昭和60年度の運動会に関するものである。

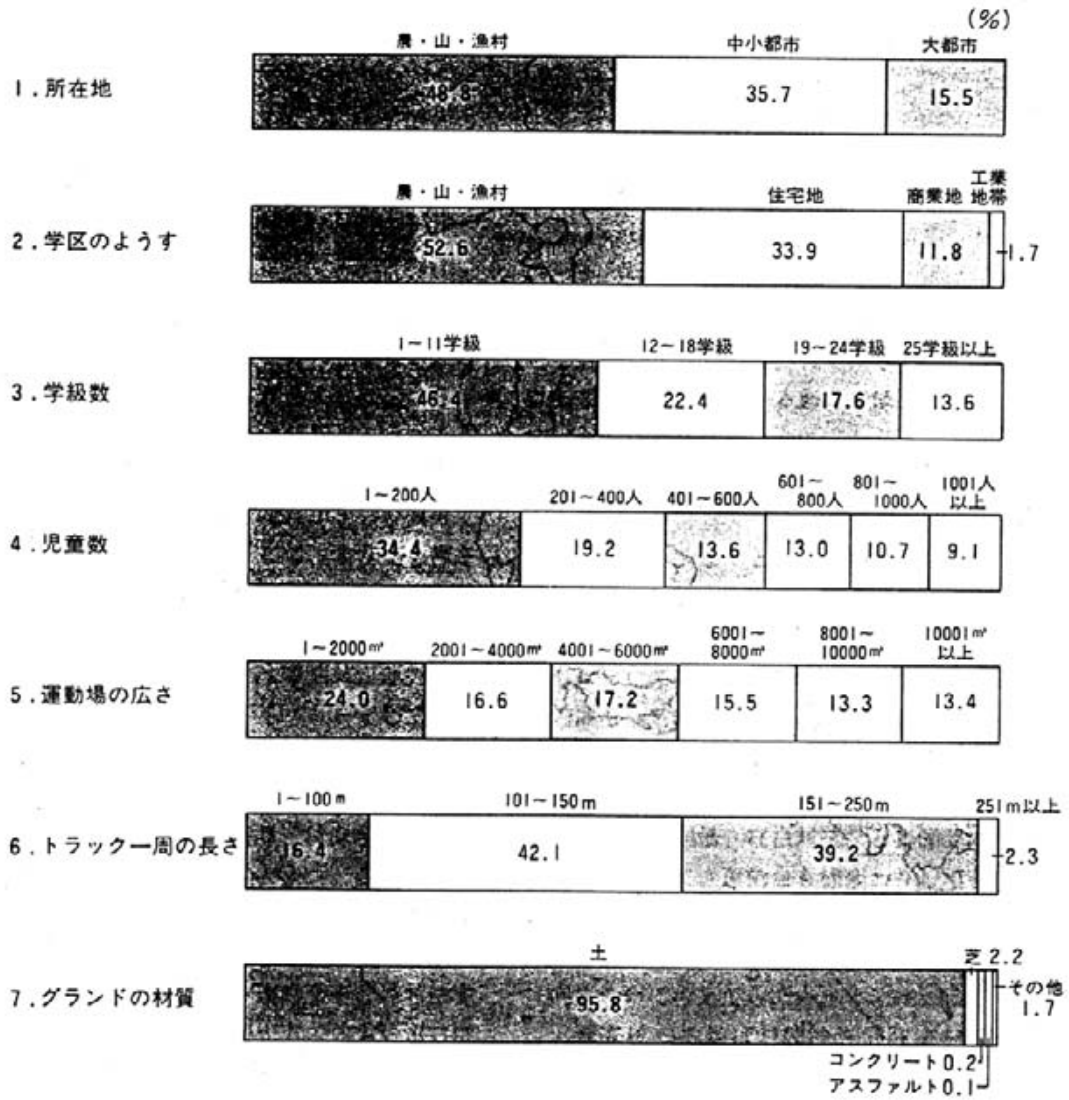
地図1 県別調査校数



地図2 地方別調査校数



図1 調査対象校のプロフィール



1. 運動会の風景



運動会の開催要項

「雲ひとつない秋空のもと、今、〇〇小学校の運動会の幕が切って落とされました。」

さしずめ、こんなフレーズのアナウンスが運動会にはふさわしい。まず、運動会の開催期日や時間、そしてその中で行われる基本的なことからについて概観してみよう。

図2をご覧いただきたい。冒頭のアナウンスで始まる学校が約7割(48.1%+19.7%)、そして、春に実施するのが5割となっている。春と秋に2回実施する学校は、約2割である。そして、春は5月下旬から6月上旬にかけて、秋は9月下旬から10月上旬にかけて、いずれも日曜日に、約半数の学校で集中的に運動会が開かれる。さらに、日曜日開催は約3分の2、月曜から土曜までのウィークデーが3分の1という結果となっている。曜日別では、日曜日が圧倒的ではあるが、「運動会は日曜

日で、町をあげてのお祭り」という通念からすれば、むしろ、平日開催が3分の1という結果に、変化の一端がうかがえよう。

次に、図3に示したように、午前8時30分開始、午後3時終了というのが平均的なスケジュールである。これから昼食の1時間を引いて、正味5時間30分が演技の時間ということになる。

図4には、運動会の進行や式次第についてまとめて掲げてある。まず、入場門に待機した子どもたちの入場から始まる。一条乱れぬ、とはいかないだろうが、特別練習の成果があって、かなり整然とした行進であるのだろう。そして、開会式では、「児童代表あいさつ」「校長先生のお話」「選手宣誓」をとり入れる学校も多い。行進の先頭で、あるいは昼休みなどのエキシビジョンとして、鼓

笛隊や器楽クラブが花形として活躍する。メインポールには、校旗がひるがえっている。

運動会の風景をこうしてスケッチしてみると、オリンピックや国体がモデルとなることがわかる。ブラウン管の画面いっぱいにアップされたあのカール・ルイスや山下泰

裕の雄姿に、自らの姿をダブらせて堂々の入場というのも悪くない。ただ、それにしても、背中が曲がっている、膝が上がらない、まっすぐ歩けない。などという教師の嘆きを耳にすることが多いのが気がかりである。

図2 運動会の実施期日

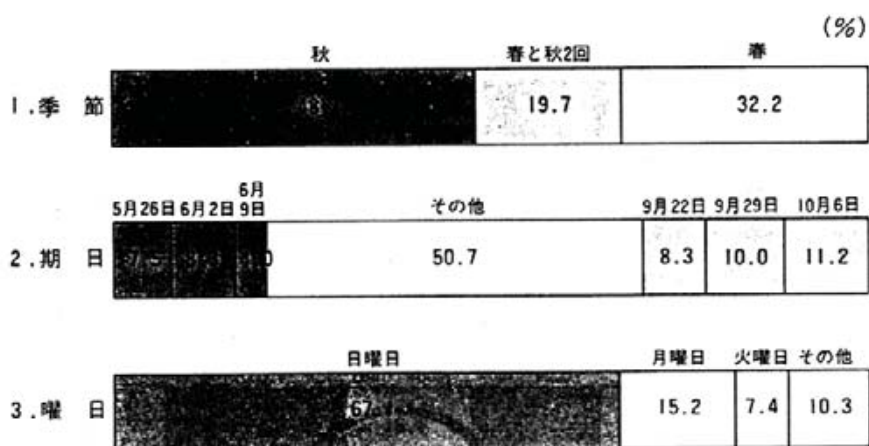


図3 開始・終了の時刻

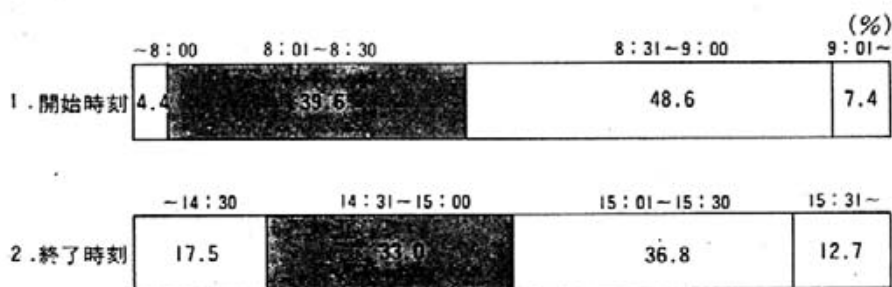
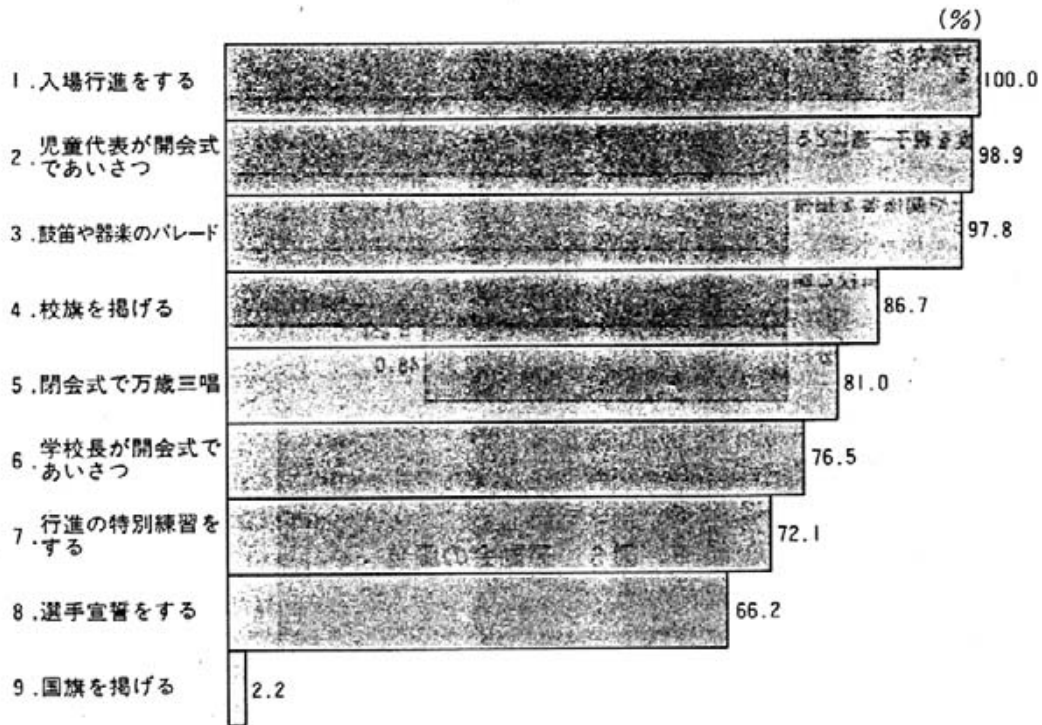


図4 運動会の進行や式次第



運動会あれこれ

それでは、もう少し具体的に運動会のようすを探ってみよう。

図5から図9までは、まとめてたずねたことがらを関連のある項目ごとに整理したものである。数値の高い項目を拾いながら、運動会のようすをスケッチしてみると、次のようになる。受付では招待者からのご祝儀をいただく。おそらく、引きかえにプログラムやお弁当を渡すのであろう。グラウンドに足を一步踏み入ると万国旗がはためき、左右に入退場門がしつらえてある。子どもたちは紅白に分かれ、ハチマキの色で敵味方に区別される。テントの下の本部席には優勝チームに渡され

る予定の優勝カップや優勝旗が用意されていて、子どもたちはそれをめざして戦いをくりひろげることになる。運動会が終わると紅白まんじゅうが配られ、明日の予定を担任から聞いた後に子どもたちは下校ということになるのだろう。一方、図10に示したように、運動会の練習のために、ほぼ10時間程度の授業がカットされ、運動会が近づくと、行進の練習にも熱が入ることになる。

少なくとも、こうした運動会の風景には、昔と比べて特別な変化は見当たらない。むしろ、こうした設営をすることが、運動会の運動会たるゆえんなのだろう。

図5 運動会と地域とのつながり

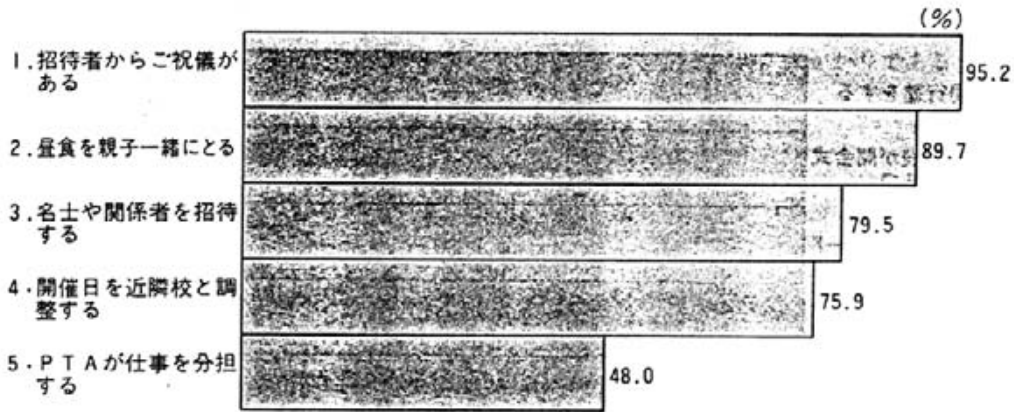


図6 運動会の服装



図7 運動会での対抗形式

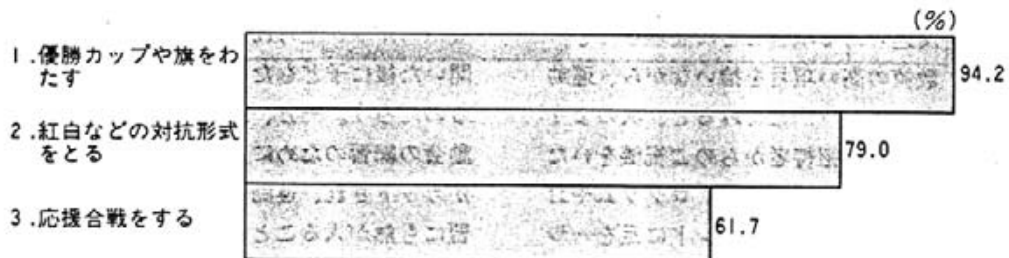


図8 運動会の記念品



図9 運動会の会場装飾

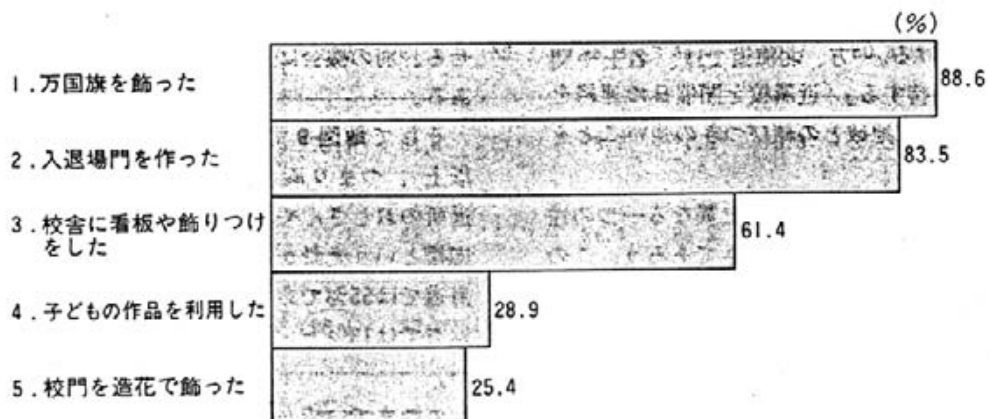
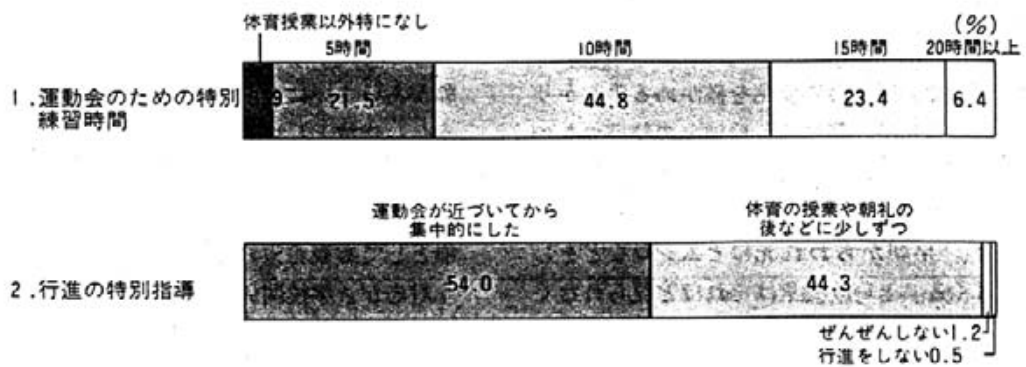


図10 運動会の練習



運動会に見られる地域差

しかし、こうした典型的な運動会の風景も、19ページの表1でみると、地方によって、かなりの違いがあることがわかる。

各項目ごとの最大値に○をつけてあるが、例えば「応援合戦をする」「紅白対抗にする」「優勝チームにカップや旗をわたす」など、競争色が強いのは関東地方の学校である。それと反対に、近畿などでは応援をしない、名士もよばないなど、地味な運動会をしている感じを受ける。一方、北海道では、「名士や関係者を招待する」「近隣校と開催日の連絡をとる」など、地域との結びつきの強いことをうかがわせる。

運動会が、他の学校行事と異なる一つの性格は、この地域との結びつきであろう。この調査票の回収にあたって、各学校に運動会のプログラムを同封していただいたが、その中にも、学校とPTAあるいは町内会など地域の自治組織との共同主催という形式をとる学校も少なくなかった。地域の諸団体の役員が運動会の役員として明記されているケースもかなり見られた。地区対抗の競技なども、伝統的に行われてきた。つまり、運動会は、単なる学校行事というワクを越えて、その地域の体育的なお祭りとしての性格をもっていたのである。

そこで、運動会の変化を確かめる手がかりの一つとして、図11に、地域との結びつきの度合いを示す結果をまとめた。さすがに、地域の人々が楽しみにしているという割合は高いが、「早朝からわれ先にとムシロなどをしきにくる」という光景はそれほど見られなくなってきた。もちろん、こうした傾向には地域差が予想される。そこで、この6項目について、以下の地図3から地図8までに、地方別に集計し直した結果を掲げた。

いずれの結果にも共通していえることは、

東京や大阪といった大都市周辺において、地域との結びつきが弱くなってきているという傾向である。それは、例えば地図6に見られるように、地域の大人ではなく卒業していった子どもが見に来るといった割合にも共通した傾向となっている。

この結果は、あくまで運動会に限定されようが、考えようによっては、地域において学校が果たしている役割の違いまでも想像させる。別の機会に追求してみたいテーマではある。

そして地図9では、「観客が児童数の2倍以上」、つまり両親と兄弟、場合によっては近所のおじさんやおばさんも一緒になっての応援という光景が見られるのは、最も多い北海道では55%であるのに対して、関東や中部地方では13%と、その4分の1程度でしかない。

ここまでで紹介した地域との結びつきの強さを示すデータは、すべてに共通して、日本列島の中心部で稀薄になっており、周辺に位置する北海道や九州では、まだ結びつきの強さが残されている。この結果は、地図10に示した「運動会の日曜日開催率」の結果と極めて類似している。とりわけ大都市やその周辺の地域では、結びつく対象としての地域の輪郭があいまいになっているという事情もあろうし、学校としても、親に参加を要請することに多少のわずらわしさを感じるということも率直なところであろう。したがって、平日開催として参観希望の方はどうぞ遠慮なくという対応が、学校関係者の側からは好まれるのかもしれない。しかし、そうすることで、運動会が伝統的に保ってきたお祭り気分はかなり抑えられたものになるだろうし、運動会の性格そのものも、かなり変更を余儀なくされよう。

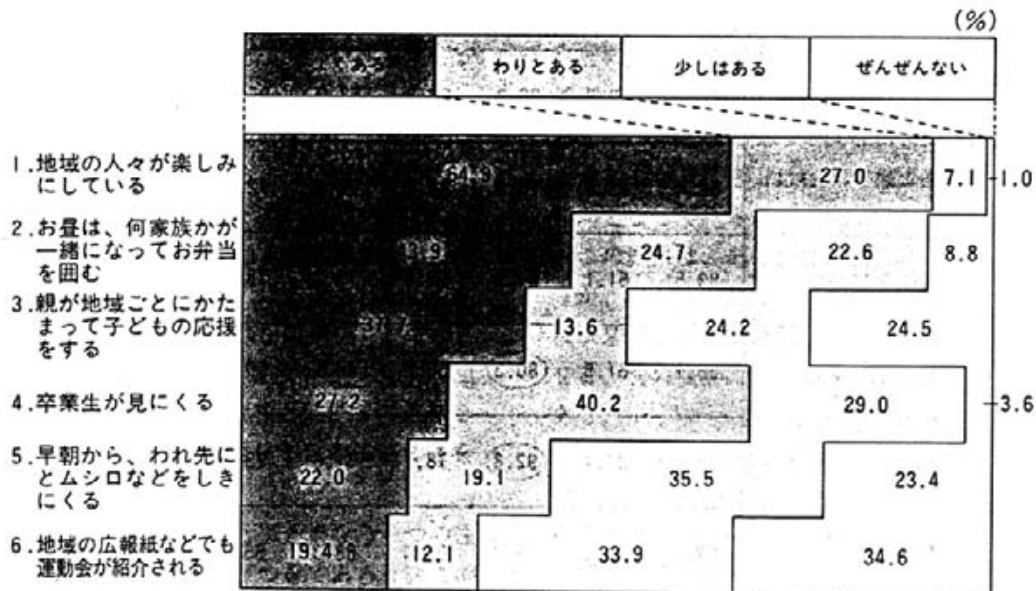
表1 運動会の地方別特色

(%)

項目	北海道	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州
校旗を掲げる	68.0	93.9	86.9	92.3	68.0	95.0	82.7	92.4
学校長の話を開会式に入れる	58.4	83.3	78.2	80.3	78.6	72.6	68.6	75.0
選手宣誓をする	89.5	61.1	64.9	59.6	73.3	78.0	38.5	69.2
応援合戦をする	56.7	61.5	80.3	59.8	46.1	60.7	60.8	48.7
紅白対抗にする	73.1	81.1	92.8	78.7	71.6	73.8	35.3	83.2
優勝チームにカップや優勝旗をわたす	97.1	96.1	97.3	94.4	88.3	96.5	75.0	94.2
昼食を親子一緒に	98.1	97.2	97.3	83.4	77.7	95.3	76.9	80.8
名士や関係者の招待	99.0	92.8	65.0	67.2	62.1	83.5	94.1	97.5
行進の特別練習	61.2	85.6	90.3	59.1	69.7	64.3	59.6	63.9
PTAが仕事を分担	32.4	48.6	38.3	40.9	43.7	75.0	60.8	71.7
近隣校と開催日の連絡	84.6	74.0	82.8	64.2	81.4	75.9	71.2	78.2
紅白まんじゅうを配る	71.4	89.5	89.2	76.2	80.4	78.6	92.3	88.3
紅白帽をかぶらせる	62.9	46.4	62.8	44.0	56.3	47.1	25.5	44.4

* ○は最大値、〰は最小値

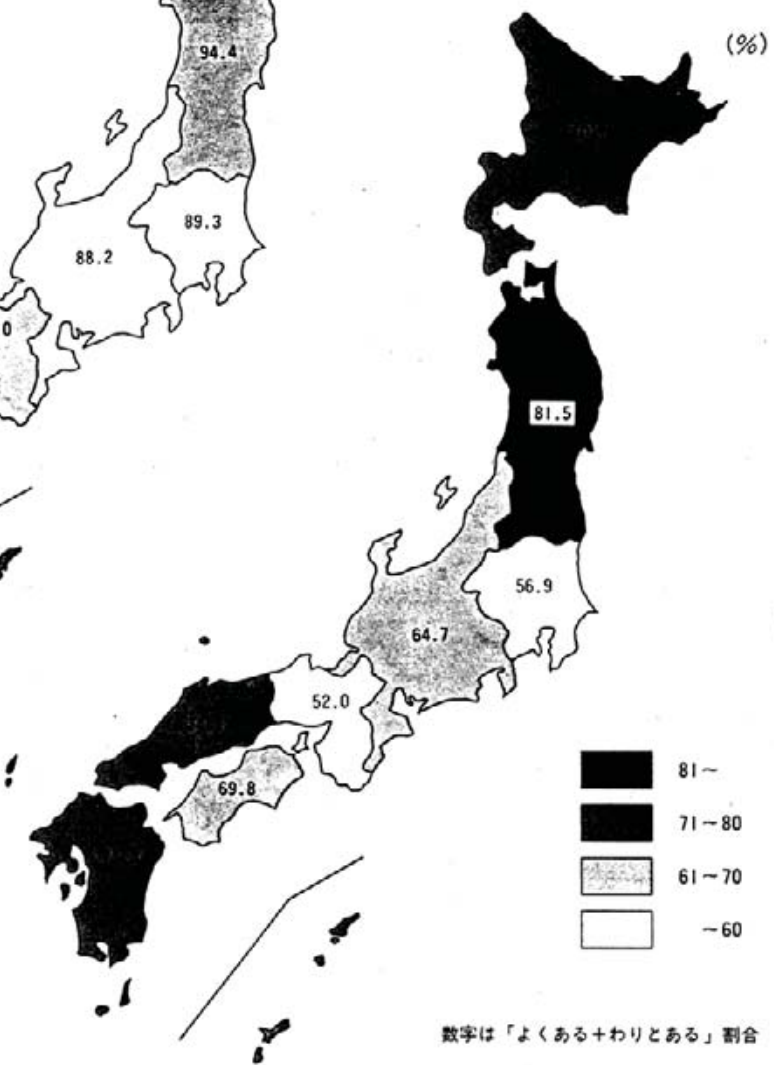
図11 地域との結びつき



地図3 地域の人々がとても楽しみにしている

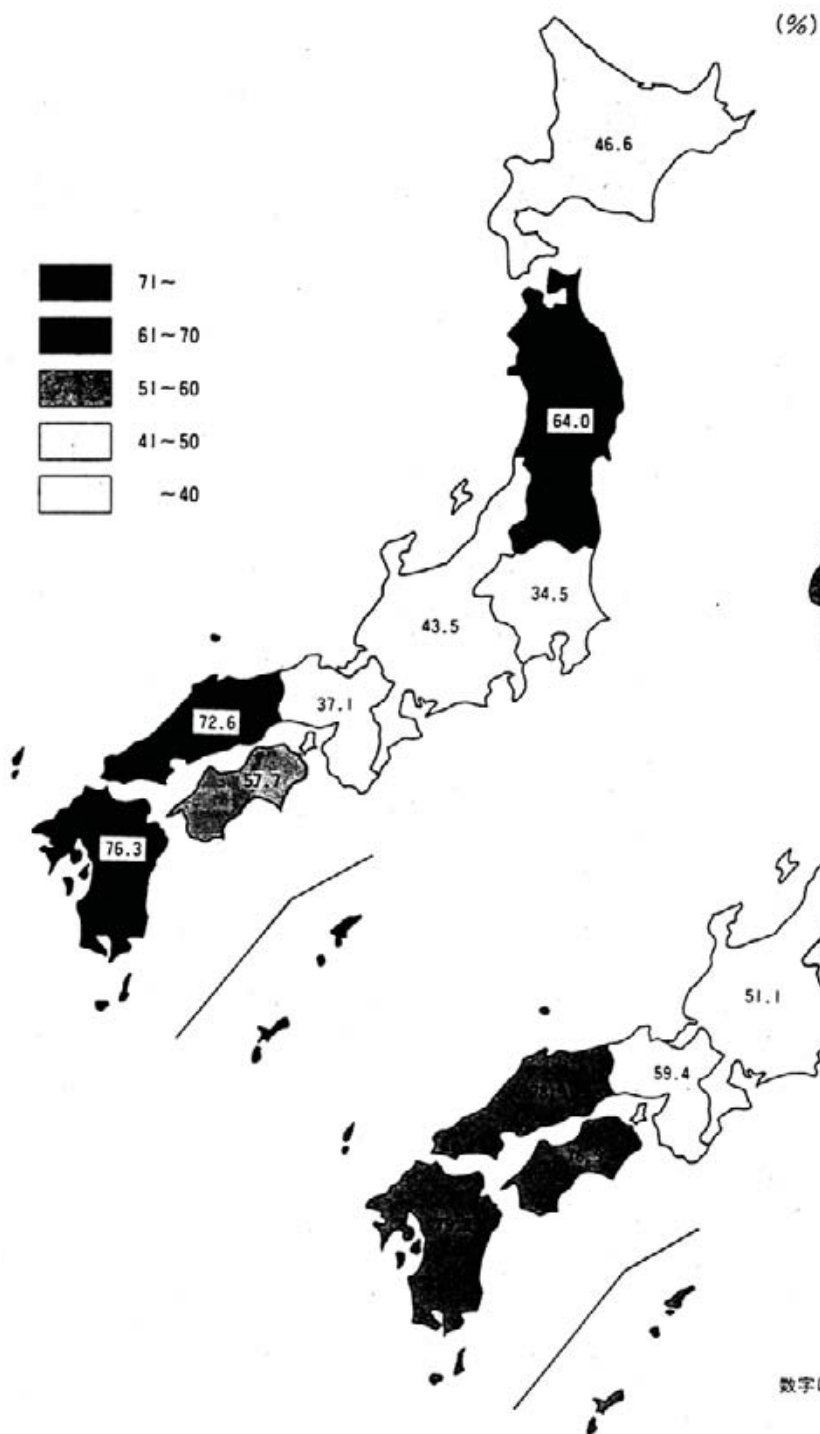


地図4 お昼は何家族かが一緒になってお弁当を囲む



数字は「よくある+わりとある」割合

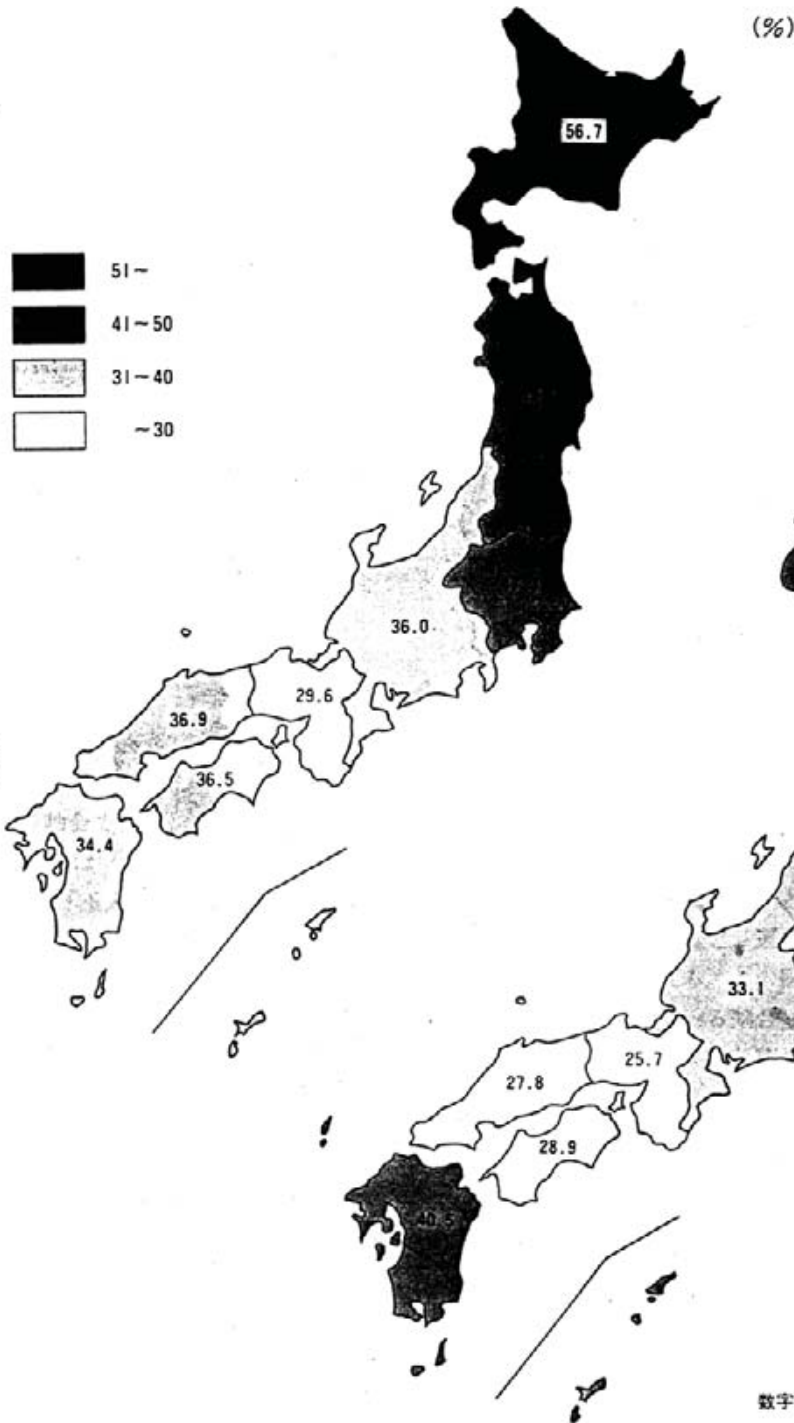
地図5 親が地域ごとに固まって
子どもの応援をする



地図6
卒業生が見にくる



地図7 早朝から、われ先にと
ムシロなどをしきにくる

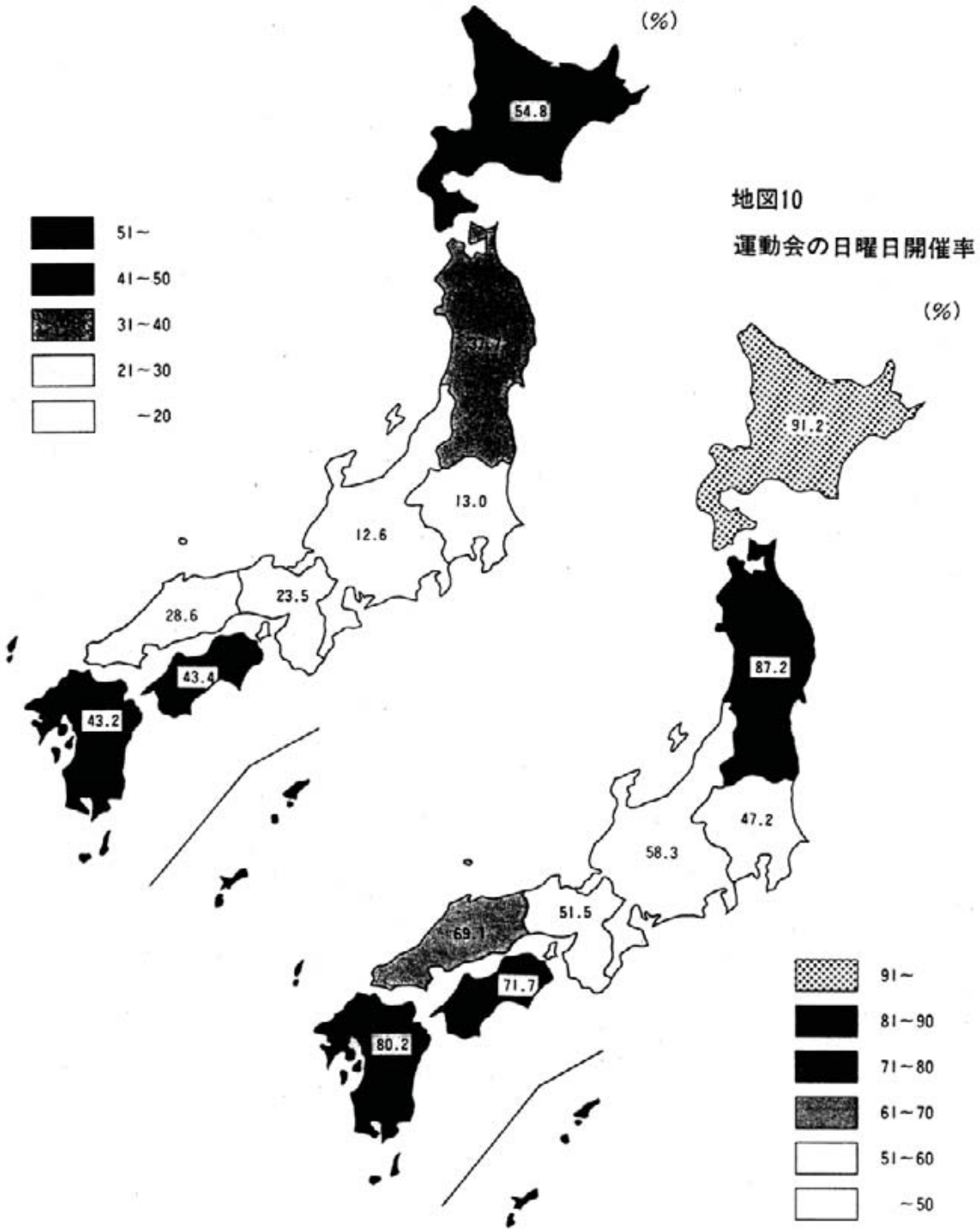


地図8
地域の広報紙などで
運動会が紹介される



地図9

応援や観衆の数
(児童数の2倍以上の割合)



2. 運動会で行われる種目



運動会の種目と変化

運動会で行われる種目とて、まず思いつくのは「かけっこ」である。そして、「綱引き」「玉入れ」「障害物競走」なども伝統的に行われてきた代表的な種目といえる。本章では、運動会で行われる種目の実施率や地域差などを確認しながら、運動会の実際と変化の方向を探ってみることにしたい。

まず、図12をご覧いただきたい。これは、昭和60年度の運動会における各種目の実施率を調べた結果である。

まず、「徒競走」から「紅白対抗リレー」までの上位5種目が、実施率8割以上となっていて、どこの学校でもたいてい行われていることがわかる。ついで、約半数以上の学校で行われた種目として、「障害物競走」から「地区対抗競技」までの7種目があり、さらにそれ以下の実施率の種目と、大きく3つの

グループに大別されている。

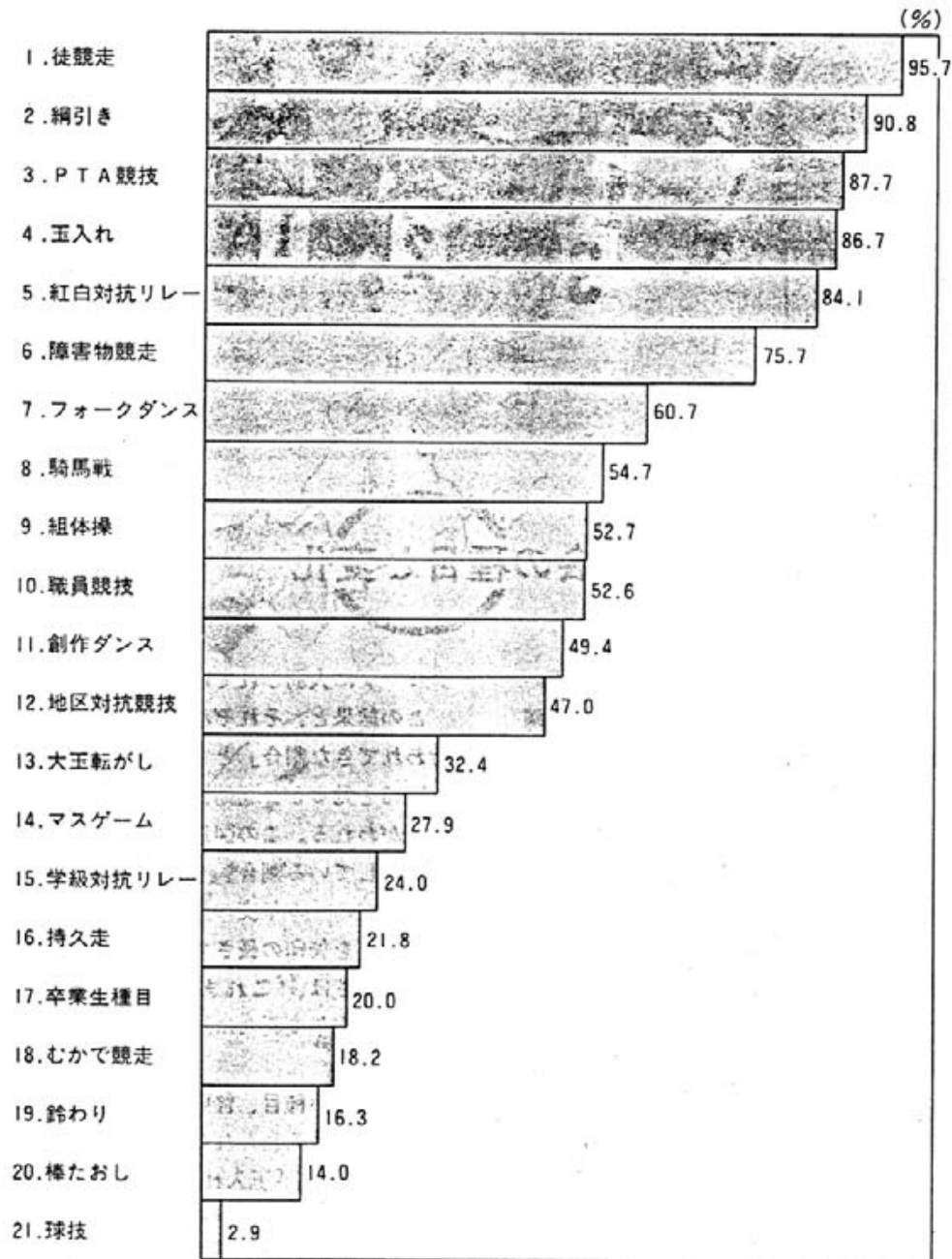
この結果と、それぞれの学校で「伝統的に行われてきた割合」とを同一グラフ上に示した図13を見ると、運動会種目の変化の一端がうかがわれる。この図13では、まず「伝統的に実施している割合」をグラフ上に示し、次に先ほどの「本年度の実施率」を記して、両者の開きを矢印の長さで示した。したがって、矢印の長さは、「これまではあまり行わなかったが、本年度新たに加えた」割合を表すことになる。

矢印の長い種目、言いかえれば、本年度より新たにとり入れられた種目を見ていくと、「障害物競走」「玉入れ」「フォークダンス」「創作ダンス」などがそれに該当する。これに対して、逆に矢印が短い種目は、「紅白対抗リレー」「地区対抗競技」「学級対抗リレー

一」「持久走」などである。これらの種目の中味を細かく検討していくと、種目に見られる変化の方向を、次の3点にまとめることができそうである。

- 運動会に華やかさを演出する種目の増加
- 個人の体力や走力がそのまま表れる種目の減少
- 地域とのつながりを示す種目の減少

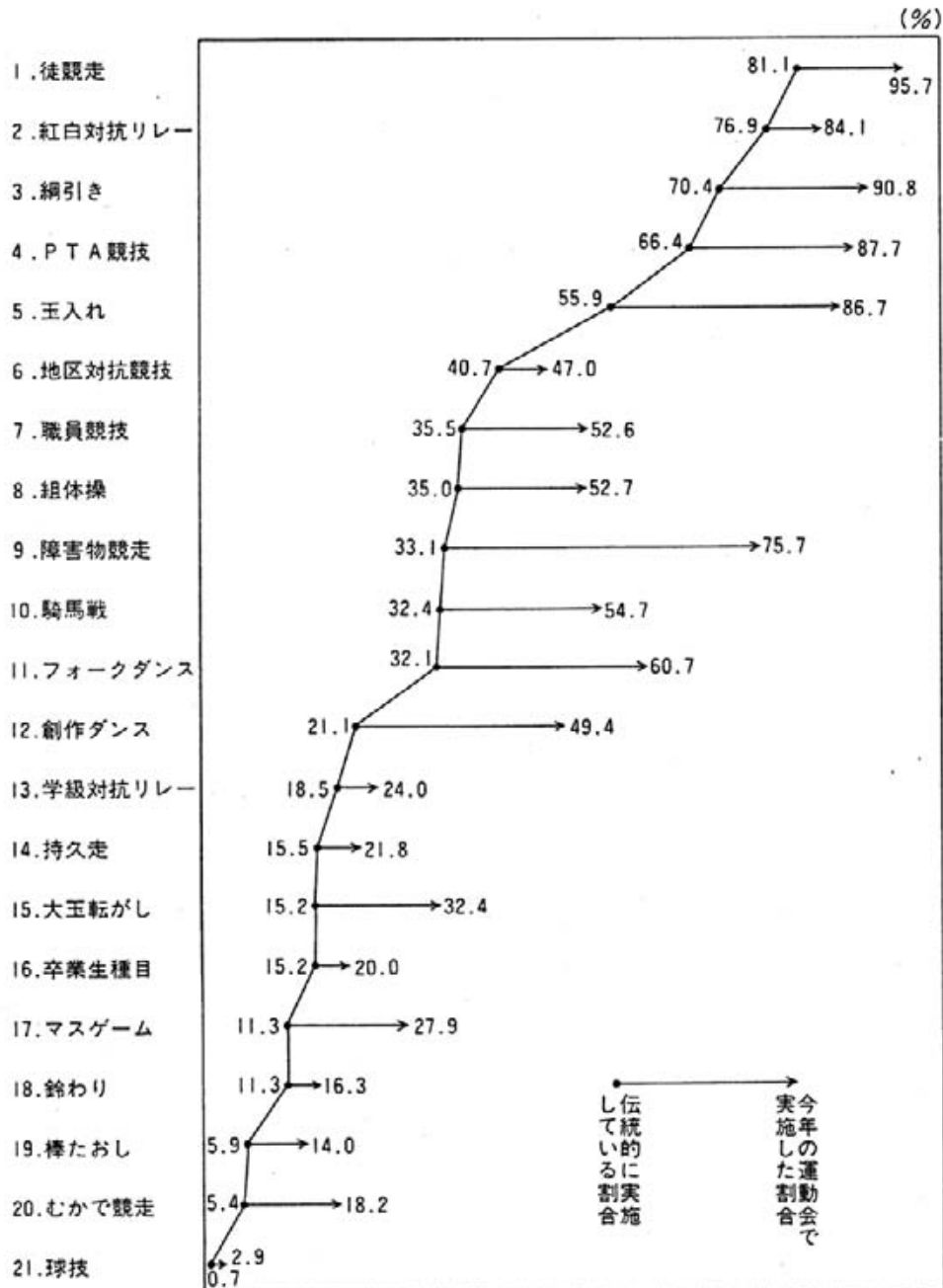
図12 今年の運動会で実施した種目



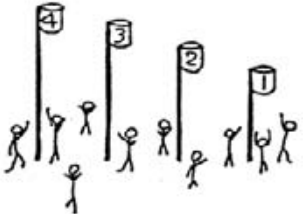
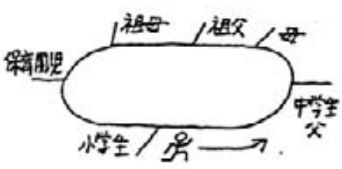
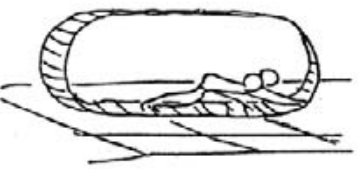
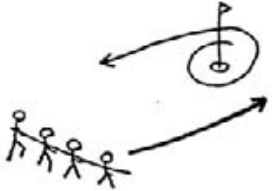
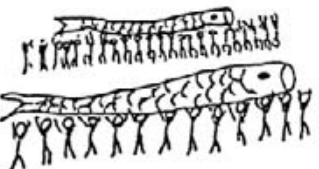

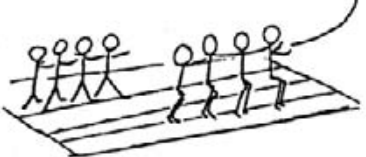

なお、ここでは、代表的と思われる21の種目について、その実施率をたずねた結果を示したが、この21種目の他にも、各地に伝統的に伝わる民俗芸能や踊り、あるいは新種目の

開発や工夫などもかなり行われている。28ページの付表に、自由記述された中からそのいくつかをまとめておいた。

図13 種目の変化のきざし



付表 団体競技コレクション

<p>○段ちがい玉入れ</p>  <p>●学年たてわりのグループで、紅白に分かれて玉入れをする。高さによって得点がちがいが、誰がどこをねらうかがチームの作戦。</p>	<p>○我が家のチャンピオン</p>  <p>●家族のうち、保育園児から老人までそれぞれのハンディに応じて走り、トラック一周のレースで勝敗を競う。</p>
<p>○戦車よ急げ</p>  <p>●段ボール紙で輪をつくり、戦車のキャタピラに見立てる。中に児童2人が入って、ころがしながら進み、速さを競う。</p>	<p>○瀬戸のうずしお</p>  <p>●地域性を考え、瀬戸大橋に関係した種目を工夫した。4人組で竹ざおをもち、旗を回って帰り、リレーをする競技。</p>
<p>○鯉の滝のぼり</p>  <p>●全校をたてわりにして、それぞれに列を作り、頭上の鯉のぼり（5mくらい）を送りながら速さを競う。</p>	<p>○あんよは上手</p>  <p>●日常の体育学習の中にとり入れている一輪車を利用してレースをする。全員が乗りこなすという学習の成果を親に披露する。</p>
<p>○ジャンカリレー</p>  <p>●全校を4チームに分け、各チーム4人組でジャンカを踊りながらリレーをする。手が前の人の肩から離れたらやり直し。</p>	<p>○親子まり入れ</p>  <p>●1年生が親といっしょに、中央のかごにまりを入れる競技。1年生は小さい円から、親は大きい円から投げるところがミソ。</p>

実施種目の地域差

次に、実施種目の地域差を眺めてみることにしよう。まず、表2をご覧ください。

各地方に共通して、徒競走が第1位になっている。何よりも、運動会の雰囲気をもっと端的に代表する種目なのであろう。しかし、以下第10位までの種目においては、順位や実施率にかなりの差が読みとれる。そこで、第1章と同様に、地方別に集計し直したデータを以下の地図11から地図18までに掲げた。

ここでも、大都市やその周辺地域を中心に実施率が高い種目と、北海道や九州といった地方で実施率が高い種目とに2分される。まず大都市およびその周辺地域でよく行われる種目をまとめると、「組体操」「創作ダンス」であり、いずれも華やかさの演出に一役買っていることがわかる。そして、地図11、地図12からは、北海道をはじめとして、東北、中国、九州、四国といった地方では、まだ競争

色が残されており、さらに、地図17、地図18からは、それらの地方では、実施種目の面からも地域との結びつきへの配慮が残されていることがわかる。

これらの結果を総合すると、どうやら、運動会の伝統的なスタイルが残されているのは北海道や九州などの地方で、大都市やその周辺の地域では、平日開催や地域との結びつきの稀薄化とともに、実施種目においてもかなりの変化がおき始めていると言えそうである。そうした変化の良し悪しの判定は難しいが、一つの視点として、運動会の教育課程上の位置づけ、つまり、運動会の目的に照らしてみ、それを達成するための必要な条件が備わっているかどうかを検討することが考えられる。その点については次章で検討するとして、ここでは、もう少し種目実施上の配慮について追求しておくことにしたい。

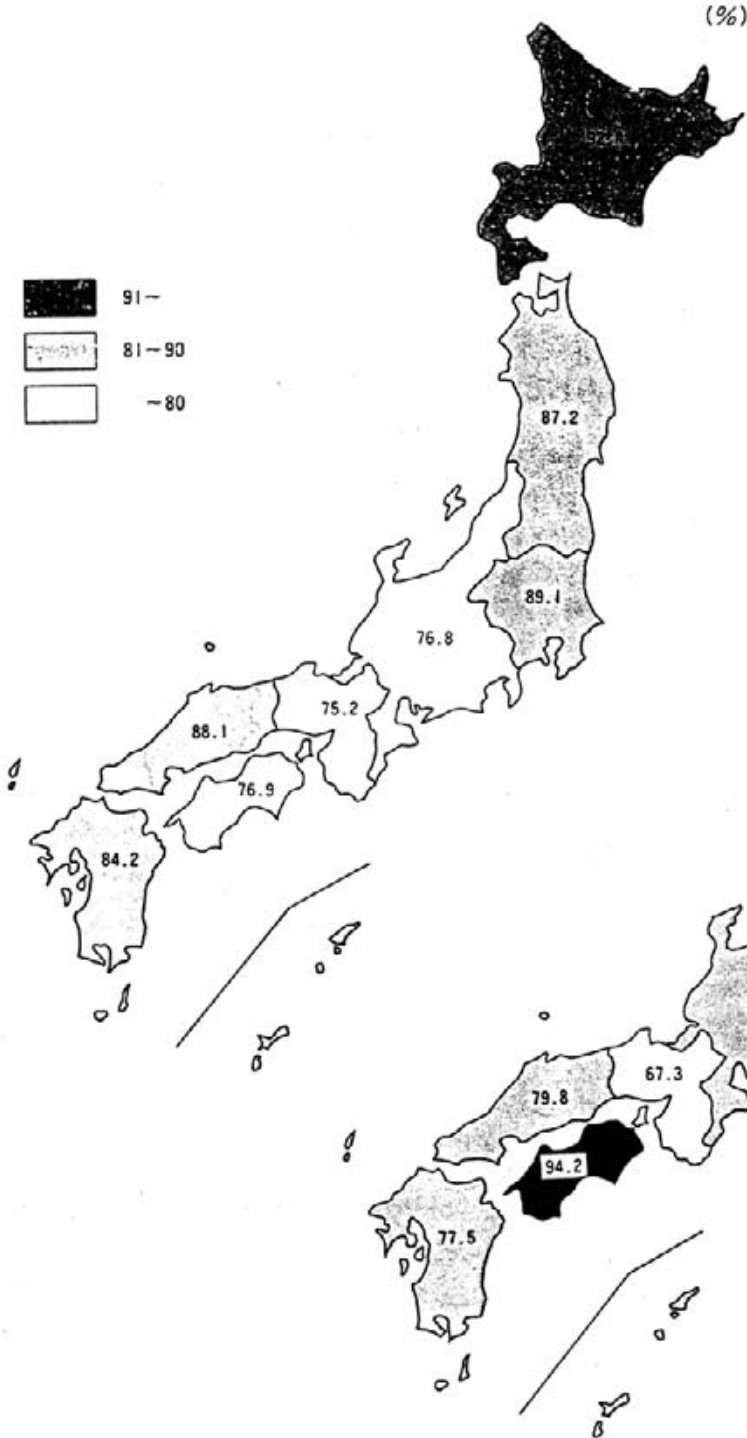
表2 地方別運動会種目ベスト10

(%)

北海道	東北	関東	中部
1.徒競走 100.0	1.徒競走 95.5	1.徒競走 97.3	1.徒競走 93.2
2.紅白リレー 92.4	2.綱引き 95.5	2.玉入れ 94.5	2.綱引き 92.0
3.玉入れ 90.5	3.玉入れ 89.4	3.PTA種目 91.4	3.PTA種目 88.2
4.綱引き 88.6	4.PTA種目 88.8	4.綱引き 90.0	4.玉入れ 86.2
5.障害物競走 87.6	5.紅白リレー 87.2	5.紅白リレー 89.1	5.紅白リレー 76.8
6.PTA種目 79.0	6.障害物競走 78.8	6.騎馬戦 77.7	6.障害物競走 72.6
7.フォークダンス 63.8	7.職員競技 61.5	7.職員競技 77.3	7.組体操 63.7
8.創作ダンス 45.7	8.フォークダンス 59.2	8.障害物競走 68.6	8.騎馬戦 59.5
9.組体操 45.7	9.騎馬戦 49.7	9.組体操 64.5	9.職員競技 58.6
10.地区対抗競技 42.9	10.地区対抗競技 45.8	10.創作ダンス 60.0	10.フォークダンス 50.6

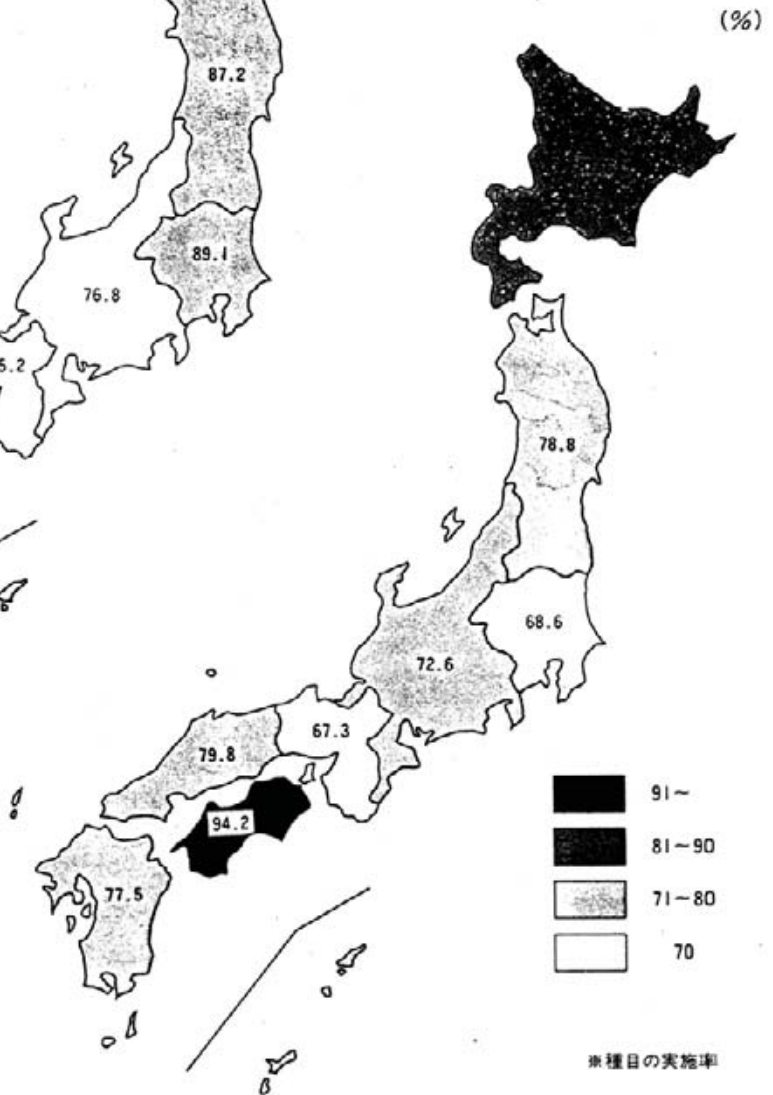
関西	中国	四国	九州
1.徒競走 94.1	1.徒競走 90.5	1.徒競走 98.1	1.徒競走 97.5
2.綱引き 91.1	2.紅白リレー 88.1	2.綱引き 96.2	2.PTA種目 89.2
3.PTA種目 86.1	3.綱引き 85.7	3.障害物競走 94.2	3.綱引き 85.8
4.玉入れ 84.2	4.PTA種目 83.3	4.PTA種目 94.2	4.紅白リレー 84.2
5.組体操 78.2	5.玉入れ 81.0	5.紅白リレー 76.9	5.障害物競走 77.5
6.紅白リレー 75.2	6.障害物競走 79.8	6.玉入れ 73.1	6.玉入れ 77.5
7.障害物競走 67.3	7.フォークダンス 67.9	7.フォークダンス 65.4	7.フォークダンス 71.7
8.フォークダンス 65.3	8.地区対抗競技 66.7	8.地区対抗競技 61.5	8.地区対抗競技 68.3
9.創作ダンス 62.4	9.創作ダンス 57.1	9.鈴わり 50.0	9.創作ダンス 46.7
10.騎馬戦 58.4	10.組体操 48.8	10.創作ダンス 46.2	10.職員競技 45.8

地図11 紅白リレー

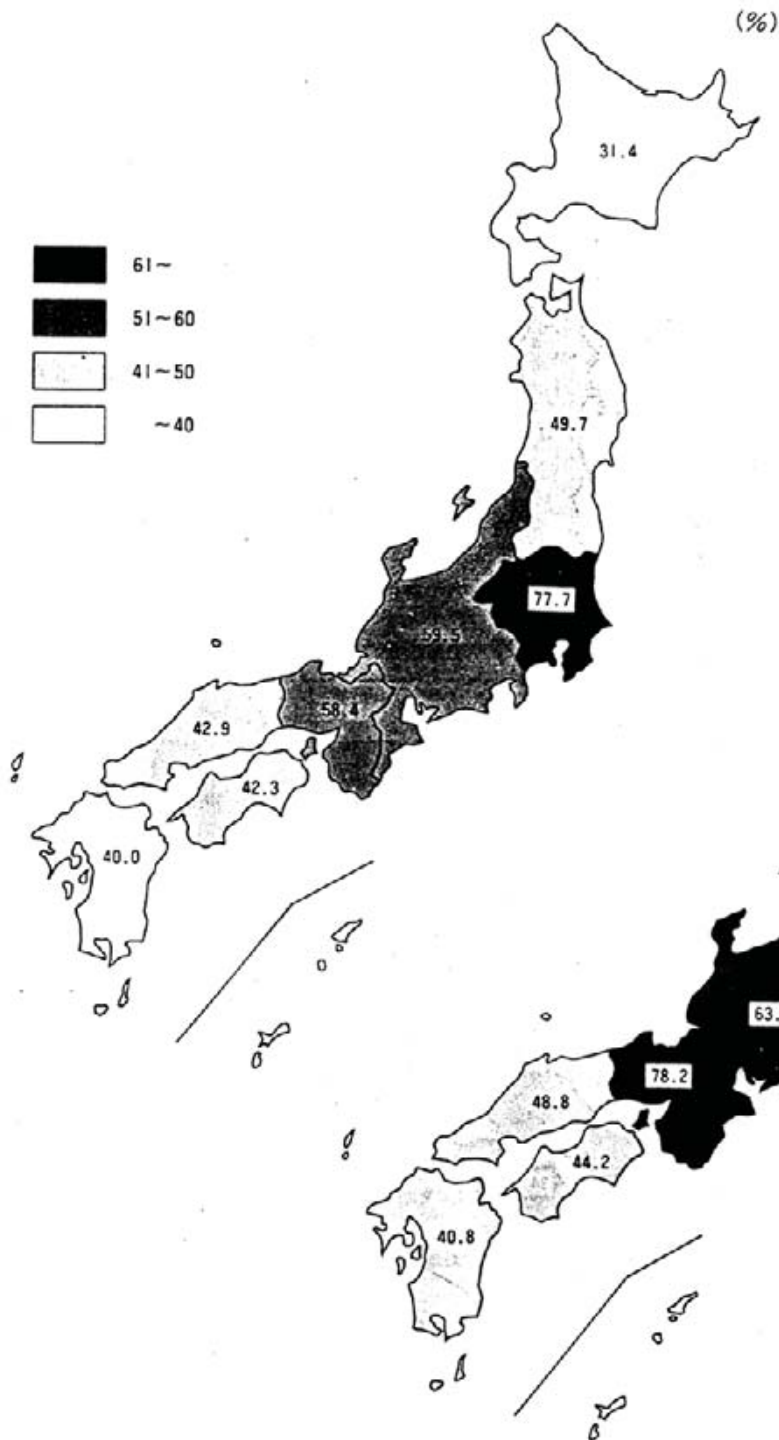


地図12

障害物競走



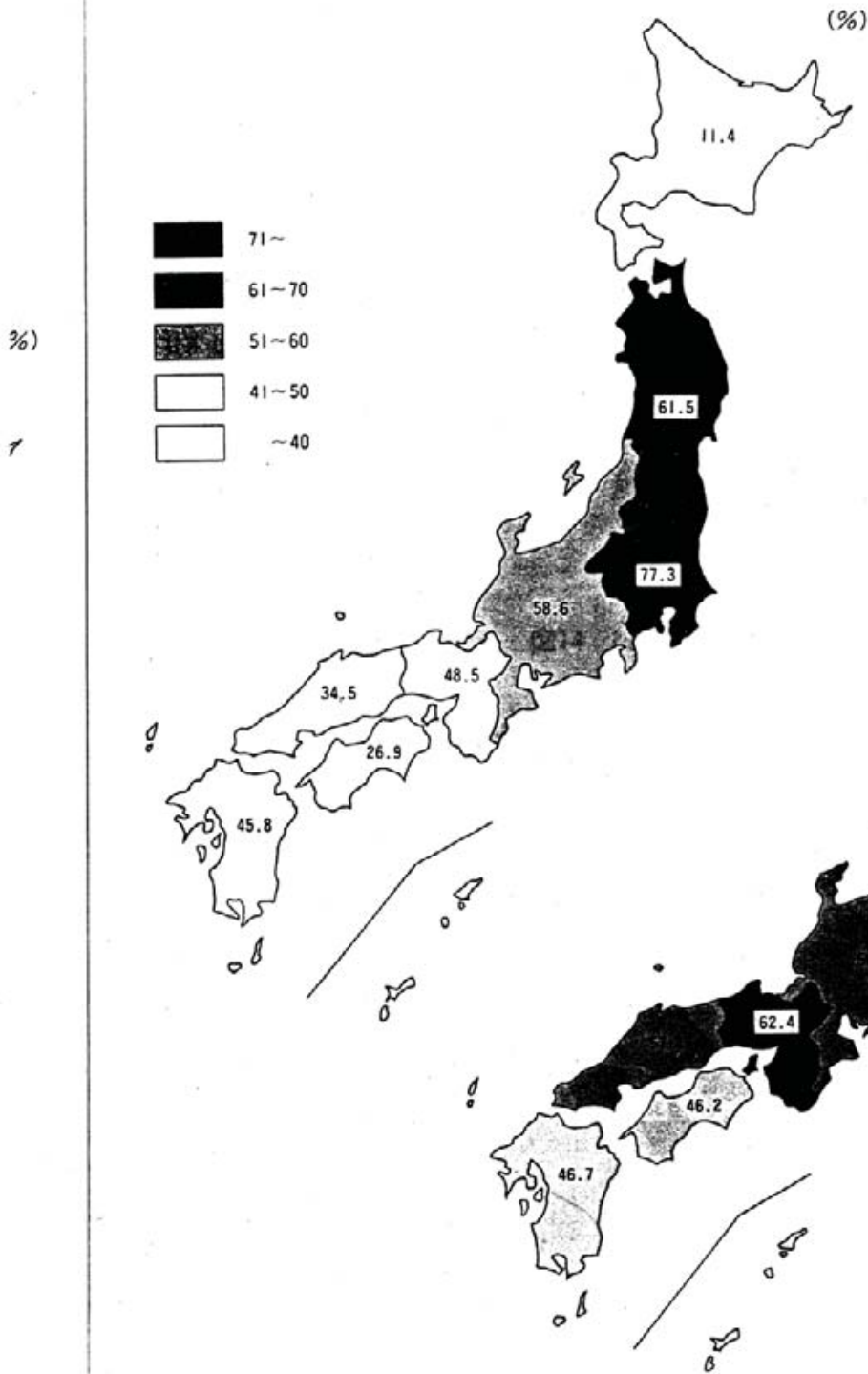
地図13 騎馬戦



地図14
組体操



地図15 職員競技 (%)



地図16 創作ダンス (%)



*種目の実施率

